

南アルプスの高山植物が消える？

かつやま てるお
勝山輝男（学芸員）

毎年夏休みは、子供を連れて、登山と植物観察を兼ねた山登りに出かけます。昨年（2006年）の夏休みは中学生の次男を連れて、南アルプス（赤石山脈）の仙丈岳（標高3033m）から仙塩尾根、三峰岳（標高2999m）、熊の平を経て、塩見岳（標高3047m）まで3泊4日で縦走しました。

北沢峠から仙丈岳へは花の多い藪沢コースを登りました。藪沢大滝を過ぎて沢沿いに登るようになると、遅くまで残雪が残るところがあります。すでに8月に入っているのに、さすがに残雪はありませんが、このあたりから高山植物が多くなるはずでした。キバナノコマノツメやジンヨウスイバなどが目につきますが、写真を撮りたくなるような被写体が出てきません。時期が悪かったのかなと思いながら登っていましたが、馬の背に近づくあたりで、やっと異変に気づきました。以前にはダケカンバの疎林の間にミヤマキンポウゲやハクサンフウロが咲き乱れていたのですが、マルバダケブキの黄色い花ばかりが目立ちます。シカが嫌いなマルバダケブキが増え、他の草本植物が減るのは、シカの採食による植生後退の典型的な症状です。

藪沢カールまで登ると、シカによる植生の後退は見られませんでした。仙丈小屋のおじさんによると、シカはすぐ下まで来ているが、カールの中までは上がってきていないとのこと。これより上部は丈の低いハイマツとヒゲハリスゲやチングルマのような背の低い草本

の世界で、シカにとっては効率の良いえさ場ではないはず。しかし、万一ここまでシカが上がってくようなことがあれば、厳しい気候に耐えて生きている高山植物は、あっという間に消えてしまいます。

仙丈岳から仙塩尾根を経て塩見岳にかけても同じような状況でした。三峰岳周辺や塩見岳の

3000m級の高山砂礫地や背の低い高山草地は以前と変わりありませんが、標高が2500～2700m付近の丈の高いハイマツやダケカンバの間に広がっていたお花畑は壊滅状態でした。熊の平や北荒川岳のお花畑も、今はマルバダケブキの黄色い花ばかりで、他の草本はシカに食べられて小さくなっていました。

南アルプスの主稜線の北半分がこのような状況なので、おそらく三伏峠から聖岳に至る南部でも状況は同じものと思います。

神奈川県丹沢では1990年頃から、シカの採食による林床植生の後退が問題になりました。日光や紀伊半島の大台ヶ原も比較的早くからシカが問題になった山です。ところが、最近では本州の太平洋側、四国、九州の1000～2000m級の山岳は、どこもシカによる林床植生の後退が起きています。しかし、まさか南アルプスの高山帯にまでシカが進出してくるとは思ってもいませんでした。

シカは本来は低地の動物で深い雪や急峻な地形は苦手と言われてきました。南アルプスの高山帯の冬は寒気が厳しく、積雪もあり、シカが越冬できる環境とは思えません。高山帯の下はシラビソやコマツガなどの亜高山帯針葉樹林で、その林床はコケに被われ、シカの食料になる植物はわずかしがなく、大食漢のシカが住むのは困難だと思います。えさの少ない針葉樹林帯や急峻な地形が障壁となり、高山・亜高山はカモシカの領域で、それよりも標高の低い山麓にシカが棲んでいました。



図2 深い森と重厚な山並みが続く南アルプス。左の高い山が間ノ岳、右奥が塩見岳。

日光白根山は標高が2578mあり、積雪も多いので、冬にはシカが越冬できるような環境ではありません。しかし、シカは積雪が少なくササなどの冬の食料が得られる所で越冬し、雪がなくなると日光白根山に移動し、シラネアオイ、ウサギギク、ハクサンフウロなどの高山植物を食べ尽くしてしまいました。尾瀬ヶ原でも積雪のない時期にシカが移動してきて湿原を荒らしています。南アルプスでもシカは春の雪融けとともに高山帯に登ってくるものと思います。

1970年代～1980年代にかけて中部山岳の亜高山帯針葉樹林にまで伐採の手が入りました。針葉樹林が伐採されると、一時的に低木や草本が増え、シカの亜高山帯への進出と増加をもたらしたものと推定されます。奥地にまで延びた林道は急峻な地形が苦手なシカにとって格好の移動ルートになったと思います。今回の山行では三伏峠から鳥倉口に下りましたが、豊口山の鞍部から鳥倉林道にかけての林床植生の後退は激しく、亜高山帯針葉樹林の伐採と林道が奥地に延びたことが、シカの高山帯への進出を促してしまったことを裏付けているように見えました。

世界遺産になった屋久島にはホンシュウジカの亜種で体が小さいヤクシカが棲息しています。屋久島には以前からヤクシカの捕食者はいませんが、それにもかかわらず、植物とヤクシカは共存してきました。ところが、10数年前から屋久島の奥地で固有植物や希少植物が著しく減少しはじめ、それは増加したヤクシカの摂食によるものとされています。

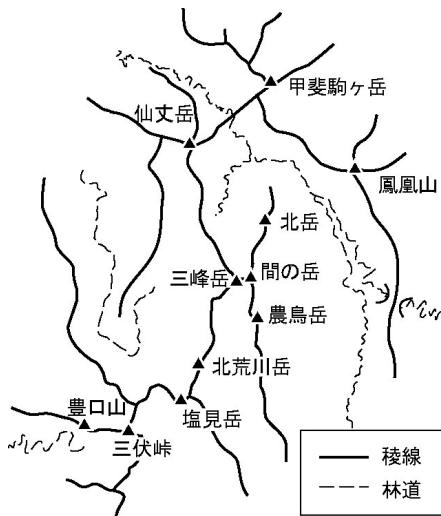


図1 南アルプス北部概念図。

す。屋久島でも奥地にまで林道が延びていますが、林道沿いに再生産力の高い植物群落が出現したことや、林道がシカの移動ルートを提供したことが、ヤクシカと植物が共存する条件を壊してしまったと推定されています。

南アルプスでも北沢峠まで林道が上がり、大井川源流や三峰川の谷の奥まで林道が延びています。これらの林道がシカの越冬可能地と高山を結び付けてしまった可能性は十分にあると思います。

山行の2日目に宿泊した熊の平には

小屋がありますが、どの登山口から登っても2日はかかります。このような山深いところでのシカ対策は大変困難と思われます。しかし、早く手を打たないと南アルプスのお花畑の質が大きく変化してしまいます。

一刻も早い対策が望まれます。



図3 熊の平のお花畑にはマルバダケブキの黄色い花が目立つ。



図4 北荒川岳(2698m)のお花畑もマルバダケブキだらけ。



図5 鹿の嫌いなマルバダケブキだけが残された。



図6 かろうじて生き残ったハクサンフワロが一輪だけ咲いていた。



図7 岩場に咲くタカネビランジは無事。

自然科学のとびら

第13巻1号(通巻48号)

2007年3月15日発行

発行者 神奈川県立生命の星・地球博物館
館長 斎藤靖二

〒250-0031 神奈川県小田原市入生田499

Tel: 0465-21-1515 Fax: 0465-23-8846

<http://nh.kanagawa-museum.jp/index.html>

編集 木場英久

印刷所 文化堂印刷株式会社

© 2007 by Kanagawa Prefectural Museum of Natural History.

R100

PRINTED WITH
SOY INK
Trademark of American Soybean Association